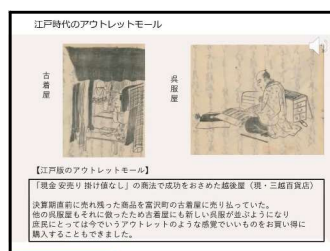


2023年度チャレンジ講座(第9回)を実施しました

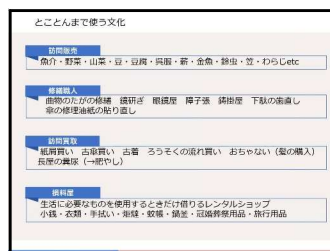
10月18日(水曜日)、第9回(文系第5回)のチャレンジ講座を実施しました。今回は経営情報論、経営戦略論が専門の松岡輝美先生(経済学部)に「地球の未来に責任を持つ企業経営」について講義をしていただきました。



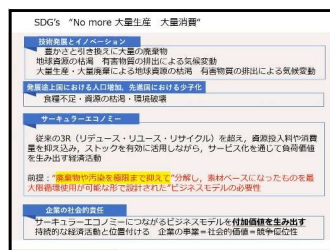
まず先生は靴や万年筆、眼鏡などの日用品や洋服や着物など、ご自分の持ち物を挙げ、メンテナンスをすれば長く使用できることを説明されました。昔の日本人は着古した着物については、おしめや雑巾として再利用し、さらにそれを燃やして灰にし肥料にするなど、ひとつの品物をとことんまで使い果たしていたことを紹介されました。



そして江戸時代には、「越後屋(現在の三越)」が、傷物となったり季節外れになった呉服をいわゆる「アウトレット商法」で在庫一掃をした結果、庶民が安価でよい物が買えたとのこと。また「損料屋」と呼ばれる今でいう「レンタルショップ」があり、品物の買い取り、修繕や訪問販売などを行っていたことなどを説明されました。このように江戸時代には「とことん使い果たす文化」「必要なものは使用するときだけ借りる」という文化が根付いていたと説明されました。



次に現代のアパレル産業における現状についてです。「大量生産・大量消費」の時代でリサイクル率が非常に低い中、10~30代の若者の方が環境保護に対する意識が高いとのこと。ファッション大国のフランスやアメリカでは、製品のライフサイクル後のリサイクルや処分についてはメーカー側が責任を持ち、環境に配慮した形の再生可能資源として再利用を行っているそうです。日本でもヤマサワジーンズやユニクロなどの企業がリメイクやリサイクルなどの取り組みを行っているということを説明されました。



今回は25校355名の高校生がオンラインで講義を受けました。事後アンケートでは、「興味深い内容を松岡先生自身の経験を含めてお話ししていただいたためとてもわかりやすく楽しい授業でした」、「持続可能な社会を目指す上での企業の取り組みなど、今後経済学部に進学する上でとても参考になることを聞いて良かったです」、「江戸時代の日本人の高度な循環型社会のお話にとっても感動しました。今は大量生産・大量消費が問題になっているけど、昔の日本人の考え方も振り返って参考にしながらこれからの日本の産業のあり方を考えていく必要があるのではないかと思います」などの感想が寄せられました。

